北朝末〜五代の義兄弟結合について

谷川道雄

一　はじめに
二　義兄弟結合の諸相
三　義兄弟結合と貴族制社會の超克
四　義兄弟結合と假父子結合

一　はじめに

いわゆる唐宋變革の歴史的性格を、内藤湖南にしたがって、貴族政治から君主獨裁政治への轉換ととらえることは、大體において異論のないところであろう。しかし、その貴族政治なり君主獨裁政治なりの内容をどう理解するかということになると、諸説紛々として歸する所を知らない有様である。そしてそのことがまた、唐宋變革の理解の仕方を多岐にわたらせ、ひいては中國史の時代區分の上で、説の大きな相違を生んできたゆえんでもあろう。いまそのことに詳しく觸れるいとまはないが、しかし、貴族政治にしても君主獨裁政治にしても、その基底には、當時における人間の歴史的な諸關係が横たわっていると考えなければならない。わたくしが、六朝の貴族制社會を、名望家の人格を中心に形づくられた一種の共同體的人間關係から把えようと試みてきたのも、一にそうした見地からであった。

さて、六朝貴族制をそのように把えるとして、それではその解體過程に、人びとはどのような人的結合のもとに轉換期を生きるのであろうか。本稿はこのような問題を基本關心とするものである。もっとも、このような問題を考える手がか

りは、唐宋變革研究の今日までの輝かしい成果にもかかわらず、必ずしも多くはない。ただそのなかで、隋唐五代に盛行した假父子結合は、如上の問題を解く貴重な手がかりと言わなければならない。

最も早い時期に、この假父子結合の意義に注目したのは、いうまでもなく歐陽脩の『五代史記』卷三六義兒傳である。歐陽脩はその傳に敍して言う。「嗚呼、世道衰、人倫壞、而親疏之理反其常、干戈起於骨肉、異類合爲父子」と。これを一口に言えば、世道人倫の頽壞ということに盡きるであろう。歐陽脩がそのように見たものを、內藤湖南は、貴族制の崩壞にかかわる現象として意義づけた。いわく、「系圖を重んずる貴族が崩壞して家族法が紊れた結果、義兒といふものが出來た。腕力の強いものを子分として養子にすることは、政略上に關係がある」と。[1] これは歐陽脩の道德主義的理解をはるかに越えた認識となっているが、いずれにしても從來の家族關係の崩壞にともなう現象として假父子結合を理解する點では共通している。

戰後、中國史の發展のすじみちを改めて檢討する必要が生れると、唐宋變革論が活潑となり、假父子結合も正面から取り上げられた。その作業を行ったのは、主として唐宋變革を古代から中世への轉換とする立場の人びとであって、その立場から、假父子結合を古代專制權力の崩壞現象として理解すると同時に、それがまだ封建的主從關係に向って成熟し切れない段階の、家父長的、家內奴隸制的關係として性格づけられる。こうした理解の問題點については、すでにいくつかの文章で取り上げておいたのでそれらを參照していただきたいが、[2] ともかくも、こうした理解によれば、假父子結合という一種の擬制家族的關係は、古代家父長制家族の再生產という點が強調されることになる。これはさきの歐陽脩の世道人倫の頽壞というような理解や內藤湖南における貴族の崩壞——家族法の紊亂という把握と、いささか趣を異にするものと言わなければならないであろう。

ところで、この時代の擬制家族的結合は、必ずしも父子關係にとどまらず、一方に兄弟結合の事例も多々存する。しかも後節に說くように、假父子結合とこの擬制的兄弟結合——以下義兄弟結合とよぶ——とは、たがいに關連しあうのであ

る。從來、假父子結合については多く言及されて來たが、義兄弟結合については、あまり取り上げられることがなかった。本誌第三十八卷第四號（一九八〇年三月）所載の相田洋論文「紅巾考——中國に於ける民閒武裝集團の傳統」で述べられたのが、唯一といってよいくらいである。[3] そこで本稿では、義兄弟結合の行われた諸事例を擧げ、それが貴族制社會の解體とどうかかわるかを論じて、唐宋變革の本質的究明にいくらかの素材を提供したいとおもう。

二　義兄弟結合の諸相

以下に掲げる諸例からも分るように、義兄弟關係を結んだ事例は、多く「約爲兄弟」とか「結爲兄弟」というような文言で言い表わされる。そのほか「以兄事」「呼爲弟」といった言い方も用いられるが、この方は義兄弟の契を結ぶところまで行かない場合もあったであろう。ともかくも、こうした文言によって表現される人的結合の諸例は、北朝末期から五代に至る時期に——そして相田論文が擧げているようにそれ以後も——數多く見出される。[4] しかし、義兄弟結合の行われるケースは決して一律でなく、むしろ千差萬別である。このことは、この時代の社會のさまざまな局面において、ひろくこうした人的結合が行われていたことを示唆するものであるが、これを結合の動機によって類別すれば、およそ次の三類に分つことができるのではないかとおもう。ちなみに、ここで動機というのは、相手側のどのような立場、身分、あるいは人閒的資質ないし志向を目標として義兄弟關係を結ぶかということである。

さてその第Ⅰ類は、國家もしくは自立的政治集團の代表者の閒で結ばれるものであって、それは政治同盟の締結を意味する。いくつかの例を擧げると、比較的早い例は、隋末の動亂時に見出される。すなわち、涿郡懷戎縣の沙門高曇晟は僧徒五十人と共に反し、縣令・鎭將を殺して自立、大乘皇帝と稱した。卽日漁陽に割據する群雄高開道のもとに使いをやって義兄弟關係を結んだが、數箇月後高開道に襲殺された。[5] これに續くものとしては、安史の亂中、史思明と安慶緒の閒に結ばれた例がある。七五九年（乾元二）、唐朝九節度の兵のため鄴を包圍された安慶緒は、史思明の援を得てようやく危

機を脱した。かれは璽綬を思明に奉って臣禮をとろうとするのであるが、思明は「願爲兄弟之國、更作藩籬之援、鼎足而立、猶或庶幾、北面之禮、固不敢受」といって血をすすって兄弟の盟約を結んだのであった。[6] もっともこれは史思明の策略であって、盟約締結の直後、史思明は慶緒を殺し、自ら帝位に卽くのである。その他、唐末以降になると、八九七年（乾寧四）、淮南の楊行密（呉の創建者）が楚の馬殷と約して「兄弟之國」となり、共同して朱全忠に當ろうと提案した例がある。[7] これより先、楊行密は淮南を征服する過程において、高駢の部將であった高霸・高晊兄弟と兄弟の約を結び、一旦安心させておいてこれを殺すという擧に出たが、[8] これも第I類に屬するであろう。また、後唐治下でも、義武節度使の王都が成德節度使王建立と兄弟の盟約を結び、中央權臣の安重誨に對抗して河北の舊事を復活させようとしたが、これも失敗におわった。[9]

第I類に屬する事例でとくに注目すべきは、中原王朝と周邊民族の閒に結ばれる義兄弟關係である。安史の亂中ウイグル葉護可汗と唐側の元帥廣平王俶（のちの代宗）との閒に約された義兄弟結合は、いうまでもなく唐がウイグルの援軍を得るためであったが、葉護可汗は大いに喜んで俶を兄とよんだという。[10] 唐末以後になると、李克用と契丹の耶律阿保機が兄弟の契を結び、五華里を隔てた兩軍の整列する閒を使者たちが馬上に杯を持ち、獻酬の禮をくりひろげた。[11] また、李克用の假子の李嗣源（後唐明宗）と耶律阿保機の次子德光（遼太宗）との閒にも、同樣の關係が結ばれたらしい。[12] 嗣源の女壻石敬瑭は德光に對して臣を稱すると共に父禮を以て仕えたが、[13] その軍事援助を背景に後晉王朝を樹立し、結局燕雲等十六州を割讓することになったのは、著名な事實である。

以上の諸例によれば、中國內部の諸勢力閒に結ばれる義兄弟關係は、多く中央權力から自立しようとする政治集團・國家の相互同盟である。高曇晟＝高開道はいうまでもなく隋朝に對して、史思明＝安慶緒は唐朝に對して、楊行密＝馬殷は朱全忠に對して、楊行密＝高霸・高晊兄弟は內侵して來た孫儒に對して、王都＝王建立は後唐の權臣安重誨に對して、對抗の必要上結ばれた同盟である。また、中原國家と周邊民族の場合も、多くは前者が敵對する政治集團・國家との對抗を

目的として結んだものであるから、これも基本的には同じであるが、ここには中原王朝と周邊民族との一種獨特な問題が介在する。また、内外を問わずこうした政治同盟が義兄弟結合という形式をとることの意味が、もっとも重要である。しかしこれらの問題については、次節で考察することにしたい。

つぎに、義兄弟結合の第Ⅱ類ともいうべきものは、名家の出身者や政治上の權勢をもつ者と親族關係を結ぶことによって、自分自身の社會的、政治的地位を高めようとするものである。そうした事例はまず北朝後期に多く見出される。北魏末、胡族出身の大官斛斯椿は、河西の牧民の暴動にあって、時の實力者爾朱榮に依託し、その計謀に參畫した。のち爾朱氏が敗北すると、その一族の首を門傍の樹に懸けたので、その父がとがめて言った。「汝與爾朱約爲兄弟、今何忍懸其頭於家門、云々」[14]と。また、河東の漢人貴族薛孝通は、宇文泰と結んで、北魏政權を高歡から自立させようとつとめたが、そのさい宇文泰と義兄弟となった[15]。これらはいずれも、危機に陥った胡漢の貴族官僚が、軍事的實力者の支持を求めた例である。西魏政權内の武人が士大夫の名聲を慕ってこれと兄弟の誼を結んだ例は、六柱國の一人于謹と漢人官僚で學問・德行を兼備した唐瑾との閒に見られる。そのため于謹は唐瑾に勿紐于氏（于謹の本姓）を賜姓せられんことを宇文泰に請うて許された[16]。

唐代に入ると、時の權勢者が山東貴族その他の名族と系譜を合わせる傾向が著しくなる。亳州譙縣の李敬玄は、高宗朝吏部にあって手腕のあった人であるが、しばしば山東士族と通婚し、趙郡李氏と合譜して、尚書省の要職をその縁故者で獨占したので、高宗の不快を買ったという[17]。高宗・武后朝に權勢を振った李義府も、もともと趙郡李氏の出身と自稱し、趙郡李氏と譜を通じた[18]。またその權勢を目當てに無賴の徒が多數群がって、「兄よ叔父よ」と奉った[19]。

これらの例は、いずれも特定の個人の閒で義兄弟關係を結んだものではなく、むしろ名族と系譜を合わせて、その親戚となることを意圖したものである。この意味においては、義兄弟結合の事例としてはふさわしくないかも知れない。そこではむしろ個人よりも家が問題である。しかし、雙方の家が通譜合族を行うさい、そのための接點が必要となり、特定の

人の間に父子關係か兄弟關係を擬制的に設定しなければならなくなるであろう。たとえば、則天武后の寵幸を得た僧懷義は本姓馮氏で、しがない商人であったが、武后はその所業を隱蔽し、且つ宮中への出入を容易ならしめようとして得度させて僧となし、又、薛と改姓せしめて娘太平公主の壻薛紹と合族を命じた。[29] そのさい、薛紹に季父として事えさせたとあるから、懷義を紹の諸父の末弟の位置に置いたわけである。また、同じ頃の官僚韋巨源は韋后と同じく京兆萬年の人であるが、その關係をより近づけんがために、「附入韋后三等親、敍爲兄弟、編在屬籍」という操作を行なった。[30] これは韋后と從兄弟となったことを意味するのであろうか。要するに、通譜・合族は、その手續きのなかに擬制家族化を含むわけであって、その反對に、義兄弟結合が通譜・合族を伴うことがしばしばあるのは、さきの于謹＝唐瑾の場合からも察せられるのである。

ところで、中唐以後になると、宦官の權勢を藉ろうとして義兄弟關係を結ぶ例が見出される。安史の亂が終焉に近づくと、叛亂鎭定に功勞のあった鐵勒系の武將僕固懷恩は朝廷との間に感情の齟齬を來して不安となり、中官駱奉先に依託して、これと義兄弟の約を結んだ。[31] また、義兄弟の誼を通じたのではないが、元和年間に梁正言なる者あり、權勢のあった中官梁守謙と同姓なるところから、守謙と同族できわめて親密であると言いふらしていた。[32]

以上のように第Ⅱ類は相手の門望や政治上の權勢を目的として、これと兄弟關係を結び、あるいは通譜するものであるが、そうした性格から、相手の個人的な人格性は必ずしも一義的ではない。前掲の于謹＝唐瑾の場合がやや例外的であるが、これとても漢人貴族たる唐氏に對する于謹の憧憬と見られぬこともない。これに對し、もっぱら相手の個人的な資質や志向が、結盟の動機となることがある。これが第Ⅲ類である。それは多く閱歷をもたない人びとの間に結ばれる義兄弟關係である點に、特色がある。

隋末の群雄杜伏威と輔公祏は若い時から刎頸の交を結び、伏威は年長の公祏に兄事したというが、[33] 兩者が兄弟の契を結んだかどうかは明らかでない。李密の麾下であった徐世勣と單雄信は、義兄弟關係を結んでいた。李密が敗死すると、雄

信は王世充に降り、世勣は唐に歸投した。王世充の滅亡後唐の捕虜となった雄信は誅されることになるが、徐世勣はこれを救おうとして成らず、「平生誓共爲灰土、豈敢念生、但以身已許國、義不兩遂、雖死之、顧兄妻子何如」と言い、その股の肉を割いて雄信に食わせたという。[26] 徐世勣は土豪の出身であり、單雄信は一介の壯士であることが分っているが、[27] いずれも名のある人たちではない。かれらが互いに親交を結んだのは、相手の財産や家柄や社會的政治的地位によるものでなく、個人の任俠の精神がたがいの好尚にかなって友を結んだと見るべきであろう。

そうした任俠の精神は、相手との間に一種の運命共同體的連帶意識を作り出し易い。安史の亂中、史思明の驍將辛萬年と同じく牙將高鞫仁、高如震との間に結ばれた義兄弟關係も、そうした見地から理解しうる。鞫仁・如震の二人はたまたま萬年を斬らなければならない政治的立場に立たされたが、鞫仁らはかえって萬年にそのことを知らせ、かつ協同してむしろ萬年の殺害を命じた上司を襲殺したのであった。[28]

恩義に感じて義兄弟關係を結ぶ例もあったようである。張光晟は一介の騎卒であったが、安史の亂中の戰鬪で乘馬を敵に射られた將軍王思禮に自分の馬を與え、姓名も告げずに去って行った。のち兩者が再會してその事實が明らかになると、思禮はその恩義に報いるために兄弟の義を結び、光晟を兵馬使に拔擢した。[29] 安史の亂後に成立した河北諸鎭のうち最も根強く唐朝に反抗した魏博の節帥田悅は、いわゆる河北の舊事を守りぬくべく戰って唐側に大敗し、窮地に陷った。その時彼は、軍士・百姓に向って言った。「今軍旅敗亡、士民塗炭、此皆悅之罪也、以母親之故、不能自到、公等當斬悅首、以取功勳、無爲俱死也」。そして馬から下りて地面に身を投げ出した。みんなはこれを憐んで、もう一戰試みようと言うので、悅は、死んでもこの厚志は忘れないと言って、將士たちとそれぞれ髻を切って兄弟の約を交わし、生死を誓い合ったのであった。[30] これも田悅の將兵に對する感恩が契機となって、運命を共にしようと誓ったものである。

その魏博の軍中でのことであるが、吳少誠は滄州出身の吳少陽と親友であり、のち少誠が淮西節度となるや、金帛を出してこれを探し求め、兄弟となって、軍の右職につけた。[31] この場合の親交については、何が契機であるか不明である。ま

た、吳少陽がもともと吳姓であったかどうかも不明であるが、少陽はおそらくのちに改名したものであろう。

ほぼ同じ頃、湖南觀察使管下の武將王國良が無實の罪を加えられて屬縣に立て籠ったが、唐の宗室李皐は降伏を勸めるのに不死を約束した。國良が降ると、皐はその手を執って、兄弟の約を交した。[31] これは大いに身分の異なる者同士が、相互に信頼しあった結果である。

義兄弟關係の下で死生を共にすることが一時的な約束におわり、やがて不和となり互いに殺戮し合うことになるとしても、それはこの第Ⅲ類の性質をそこなうことにはならないであろう。さきにも擧げた淮南の楊行密は、もと同鄕の田頵らと義兄弟の契を結んでいたが、行密の擧兵にあたって、田頵はその一翼を荷ったのである。[32] また、周行逢・潘叔嗣・張文表の三人は、互いに心を一にして楚の復興を誓い合った。ここでは義兄弟の契を結んだとは記されていないが、三人はもとより親交があり、叔嗣は周行逢に兄事している。[33] ただ、楊行密＝田頵も、周＝潘＝張も、あとではその親交にひびが入って、悲劇的な結果となる。吳少誠＝少陽も同樣である。

それはさておき、周＝潘＝張の例では、義兄弟的關係が一對一という關係を越えている（さきの辛萬年＝高鞫仁＝高如震の場合も、もし鞫仁と如震が眞の兄弟でなければ同じである）。後周を興した郭威も、共に兵營にあった李瓊ら十人と兄弟を約し、他日富貴を共にしようと誓い合ったのであった。[34] これはかつて那波利貞博士が紹介された宋太祖趙匡胤の義社兄弟を想起させる。趙匡胤は九人の刺史・節度使らと盟約を結び、義兄弟となって宋朝を興立したと言われる。[35]

以上第Ⅲ類として擧例したところに就いて見ると、隋末頃から無名の武人の間で義兄弟結合が盛行したことが分る。その結合の動機は、第Ⅰ・Ⅱ類のように、個人がその背後に負うている政治勢力や社會的ステイタス等々でなく、もっぱら相手の個人的資質や志向である。任俠、犧牲的精神などの他、自分にはないすぐれた能力への心服も、互いを結びつける契機となる。[36] 前引、楚の復興を誓い合った周＝潘＝張が、それぞれ「能謀」「果敢」「善戰」という特性を具え、そのチーム・ワークによって成功を收めたと言われるのも、結合の契機が個人的な資質・志向にあったことを示唆する。そして

それらは、單に個人の長所に止まるのでなく、他人との連帶の契機となるのであるから、心情的に言えば、それによって人を受け容れる開放的性質のものであったと、一般化できるであろう。

第Ⅲ類に屬する事例がとくに武人の世界に多く見られるのは、そのためであろう。また、こうした種類の結合は一對一に止まらず、三人あるいは十人という風に集團化し、結社化することを可能にする。そしてそれが特定の政治目的を共有するとき、一個の政治集團となり、時としては新國家建設の基礎ともなるのである。如上の例で言えば、吳・楚、後周、宋の各王朝が、このことに關わるであろう。

さらに、かれらがとって代ろうとする既成の國家から見れば、それは反體制組織ともいうべきものであろう。後世のいわゆる匪賊や叛亂集團、祕密結社などの成員間における義兄弟關係も、この第Ⅲ類の延長線上にとらえ得るであろうが、詳細は前記相田氏の所說にゆずりたい。

三　義兄弟結合と貴族制社會の超克

以上擧例してきたように、Ⅰ、國家・政治集團の首長レベルにおいて、Ⅱ、政治的社會的支配層の間において、Ⅲ、無名の武人世界において、という風に、六朝末から五代にかけての約四百年間には、社會のあらゆる次元で、義兄弟結合が行なわれた。しかしその四百年のあいだ、この三類には、それぞれ時期によって消長がある。ⅠとⅢは隋末內亂の時期に一時顯在化するが、とくに盛行するのは、唐朝後半期と五代である。當然の事ながら、隋唐王朝の統一性が確固たる間は、自立的政治集團や國家が出現することはないし、又、そうした時代は文官主義が主要な體制であるから、そうした傾向があるのは言うまでもないであろう。これに對して、第Ⅱ類は、北魏末から唐朝前半期まで、大體において持續しているように感じられ、安史の亂以後にはあまり例を見ない。これはさきにも觸れたように、この時期がとくに政治權力と貴族制社會とが相互補完關係にあった時代だからであろう。それはいわば、貴族制社會が崩壞してゆく時代の過渡的性格を

表現している。これに對して、第Ⅰ・Ⅲ類は、ポスト貴族制時代の國家や社會のあり方を直接示唆しているところがある。以下この點について、少しく考察を加えよう。

まず第Ⅰ類から述べることにするが、一體、國家・政治集團の首長間に義兄弟關係が結ばれることの意味は、どこにあるのであろうか。さきに述べたように、その目的は共通の目標に對する政治同盟にあるのであるが、それが義兄弟結合という形式をとることの意味が問題である。この同盟關係を規定する言葉として、しばしば「兄弟之國」という用語が用いられることに注目したい。さきの例で言えば、史思明の安慶緒に對する提言のなかにもこの言葉が用いられ、楊行密＝馬殷の例でも同樣である。

「兄弟之國」という語の來源をたずねると、『周禮』春官大宗伯に「以嘉禮親萬民……以脤膰之禮親兄弟之國、以賀慶之禮親異姓之國云々」とある。[37] この箇所はさまざまの場合における禮儀を規定したものであるが、「兄弟之國」が「異姓之國」と相對して用いられているところから見ると、これは、鄭注に述べる通り「同姓之國」の意であろう。周の封建制における同姓諸侯との關係を規定したものに他ならない。周の封建制は同姓諸侯を中心としたものと言われているが、[38] ここにおける「兄弟之國」とは、實際上周王と血緣關係にある人びとの封國を指すわけである。この意味では、隋唐・五代の「兄弟之國」が擬制的關係であるのと異なる。この言葉が非血緣的な國際關係として擬制的に用いられるのは、戰國時代になってからである。

戰國末、張儀が楚王に、齊と絶って秦と結ぶことをすすめた言葉に、「大王誠能聽臣、閉關絶約於齊、臣請獻商於之地六百里、使秦女得爲大王箕帚之妾、秦楚娶婦嫁女、長爲兄弟之國、此北弱齊而西益秦也、計無便此者」と。[39] ここに通婚關係を重ねることによって「兄弟之國」を形づくろうというのは、雙方の男子が直接に義兄弟關係を結ぶのではないが、一種擬制的な「兄弟之國」と言いうる。同じく張儀の言葉に、「今從者（合從同盟國）一天下、約爲昆弟、刑白馬以盟洹水之上、以相堅也、而親昆弟同父母、尙有爭錢財、而欲恃詐僞反覆蘇秦之餘謀、其不可成亦明矣」[40] とある。合從策を批判した

言葉であるが、要するに、戰國以後擬制血緣による國際同盟が結ばれるようになったことを示している。有名な漢と匈奴との兄弟盟約も、その延長線上にとらえることができるであろう。

以上のように、「兄弟之國」とは、本來、血緣のつながった人びとを主權者とする國家間の關係であり、それが、かかる關係の崩壞後、戰國諸國家間の同盟關係として擬制化されて用いられるものであった。その擬制化の意味は、さらにつぎのように理解されるであろう。すなわち、本來の「兄弟之國」においては、血緣關係がそのまま政治關係として機能する。したがってその封建體制は一面から言えば貴族制であって、「兄弟之國」の擬制化は、この貴族制の崩壞、政治における身分制の打破という事態の上に實現されるものであろう。さらに、漢と匈奴との關係ということになれば、この身分制打破は、胡漢の區別をも超えるわけである。

六朝末～五代の、擬制的な「兄弟之國」においても、やや似た事情が考えられないであろうか。六朝の貴族制國家は、特定の家柄が政治上の支配階級を構成した。もとよりそれは、周代のそれと同じではない。分裂的性質を強く帶びているとはいえ、國家の體制はあくまで統一國家であり、貴族階級は官僚として政治權力に參與し、かつての「國」もまた、州郡縣制によって統治された。しかしそれにもかかわらず、特定の血緣につながるもののみが政治參加を可能にするという原則が、當時を支配した。そして、しばしば身分的內婚制の語で語られるように、[41] 貴族各家は、相互の通婚等を契機として、階級的連帶意識を共有していたと思われるのである。

隋唐時代に入ると、この原則にはさまざまの修正が施される。その修正とは、一口に言って、貴族制の合理化による貴族階級の範圍の擴大に他ならない。そしてそれは、王朝內のいわゆる內臣のみならず、周邊民族の首長（部族貴族）たちに對しても、都督・刺史・縣令などの官職を與えてこれを羈縻し、ここに貴族制は周邊世界にまで擴大したのである。[42]

さて、この時代の擬制的に結ばれる「兄弟之國」は、このような貴族制を打破してゆく潮流の中で出現した政治勢力の間に結ばれるのが特徵である。隋末、沙門高曇晟が義兄弟關係を結んだ高開道は、もともと煮鹽を生業とした一介の壯士

であって、そのかれが衆をあつめて群雄となるという事態は、往々にして名家を中心になされた六朝貴族制社會の集團形成方式からすれば、大いに異質と言わねばならない。隋末群雄の多くは、高開道のような地位も財力もない勇士型の人物か、さもなければ、財力はあっても貴族階級とは到底言いがたい富農・土豪型の人物であって、いずれにしても、貴族制社會の底部から崛起して、内亂を契機に自立的政治集團を組織した人びとである。唐朝が内亂鎮定に成功すると、かれらはその中に吸收・編成されて行ったと思われるが、しかしともかくも、隋末唐初のこの内亂時においては、貴族政治の原則である、特定の家柄が政治を擔當するという原則は、一時つき崩されたのであった。

つぎにこのような情況が生れたのは武韋時代であるが、[13] それは宮廷内の狹隘な世界に限定され、非貴族的政治集團を作り出すまでには行っていない。決定的な情勢は安史の亂によって切り開かれる。安祿山と唐朝中央との力關係の變化がこの内亂の一要因であるが、さらにその原因として、およそ二つの、互いに關連しあう事由が考えられる。一つは對外關係の變化であり、具體的に言えば、周邊民族の自立性の增大による羈縻政策の破綻である。武后朝から玄宗朝にかけての時期、周邊民族の首長制（部族貴族制）に動搖を來たし、部族連合からより強大で統一的な國家への發展が始まったことが羈縻政策破綻の一因である。第二に、こうした事態に對應して、唐は邊境に常備軍を設置する必要に迫られ、かくて府兵制方式から健兒制方式に轉換したことは、周知の事に屬する。健兒制は傭兵制度を前提としていて、貴族制の人格主義的支配はもはやここには貫徹されなくなっている。

さてこのように、中國内外における貴族制破綻の申し子とも言うべきものが、玄宗朝末年における邊境軍であって、安史の亂及びそれ以降の軍閥諸勢力は、ここに端を發する。そしてこれら軍閥自身も、本來は、異民族出身か兵卒上りの武將であった。中唐以後、唐の宗室や貴族的官僚によって藩鎮が掌握される例が見られるけれども、それは新事態に對應するかれらの轉身の一途にすぎないのであって、基本的には、内藤湖南のいうように、「兵は門閥より出でず、門閥は兵にならず、兵は庶民の低き階級のもののみであるが、これに勢力が落ち込んだ」[14]のである。そして黄巢の亂以後は、宗室・

貴族の轉身の例も皆無となり、もっぱら無名の人びとが軍閥として政治の柄を握るのである。

安史の亂以後において國家間に義兄弟關係が結ばれるのは、このような狀況をふまえたものに他ならない。それは、身分・出自にかかわりなく政治權力を擔う人びとの間に結ばれる、對等にして友好的な關係を意味する。[15] もちろん、現實にはこの同盟關係は瞬時にして解體し、一方が他を併呑する結果となることが多いのであるが、少くともその建前においては、對等と友好をうたうものであった。

中原王朝と周邊民族の首長の間に結ばれる義兄弟同盟も、このような身分水平化のすがたとして理解し得る。さきにも述べたように、唐前半期の羈縻體制は、周邊民族の首長を中國風の貴族官僚集團のなかに組み入れる役割を果した。しかしその唐風化された部族貴族制は、諸民族によって異なる經緯をたどりつつ――いまはそれについて詳述するいとまはないが――強大な統一遊牧帝國へと變身してゆくのであって、ウイグルも契丹もそれぞれその例を示すものであろう。かくて、中原王朝との對等性が生れ、兩者の間の友好同盟は、義兄弟關係によって保證されることになるのである。

以上、第Ⅰ類に屬する國家乃至政治集團間の義兄弟關係による同盟が、貴族制社會を乘りこえてゆこうとする場に成立したことを論じて來た。第Ⅱ類もまた、貴族制社會の內部に進行する身分的水平化運動の一つの表れである。なぜなら、この類には、門望と政治的權勢の相互補完關係として結ばれる例が目立ち、それは前者から政治上の實權が去りつつあることを示しているからである。とはいえ、貴族の社會的名聲はなお依然として根強いものがあり、後者にとって名門と譜系を通ずることがとくに重要であって、そのような場合は、個人間の義兄弟結合よりむしろ家同士の合族關係が問題になったであろうことは、すでに前述した通りである。

しかし、第Ⅲ類になると、個人の資質・能力・志向などが動機となる。これは身分的水平化運動の一層進化したすがたを示していると言うべく、第Ⅱ類中、門望を相手に通譜する例がどちらかと言えば唐代前半期までに多く見られるのと對照的に、こちらは唐後半期以降に屢見する。無名の武人たちの間に結ばれる義兄弟結合が、しばしば政治權力樹立への協

同體制を形づくったことは、前に見たとおりである。こうして、第Ⅲ類と第Ⅰ類との間を、ある種の循環的な論理がつなぐことがありうる。たとえば、田頵らと事を起して淮南を得、吳國を作り上げた（第Ⅲ類）楊行密は、その後楚の馬殷と義兄弟關係を結んで（第Ⅰ類）、朱全忠と對抗しようとした、というが如きである。一般化して言えば、身分・出自を越えた個人間の盟約が新興國家の形成を基礎づけ、かくして生れた諸國家の同盟關係として、義兄弟關係が一まわり大きく擴大再生產されるのである。この意味で、第Ⅰ類と第Ⅲ類とは、個人レベルか國家レベルかの相違だけであって、本質的には變りがないのであるが、まだ權力を掌握していないだけに、第Ⅲ類の例の方に、より純粹な眞情の流れを見ることはできるであろう。[46] それはともかく、第Ⅲ類が單に個人間の友愛關係にとどまらず、結社化すなわち集團化の傾向を帶びてゆく場合のあることは、既成權力への重大な脅威となる。後世、清朝政府が個人間の義兄弟盟約そのものさえ嚴禁したのも、そのためであったと思われる。[47]

四　義兄弟結合と假父子結合

以上のように大觀してきて、義兄弟結合を貴族制社會の解體過程における新しい人的結合樣式と考えることは、決して不當でないことが明らかであろう。とすれば、これと假父子結合との關わりは、どう理解すべきであろうか。

まず義兄弟關係を結ぶ場合、その擬制家族的關係は、當人同士だけでなく、それぞれの家族にまで及ぶことが考えられる。たとえば、安史の亂中におけるウイグル葉護可汗＝廣平王俶の場合、葉護可汗が俶の長子雍王适（後の德宗）に會見したとき、可汗は雍王に、拜舞して叔姪の禮を執ることを要求した。しかし俶はこの時すでに卽位していたので（代宗）、臣下の藥子昂が、「雍王天子長子、今爲元帥、安有中國儲君向外國可汗拜舞乎」といって八方防衞につとめたので、可汗もようやくこの要求を取り下げた。[48] しかし、兄の子は弟にとっては姪であるというウイグル側の論理は筋が通っている。後唐莊宗李存勗が契丹の後援を藉らんとして叔父を以て耶律阿保機に事え、叔母を以て述律皇后に事えたのは、李克用＝耶

律阿保機の兄弟關係を敷衍した結果である。[48] 西魏の于謹は唐瑾に對し、子孫に弟姪の敬を行わしめ、唐代、僕固懷恩と中官駱奉先の例において、懷恩の母は奉先の貳心を責めたのち、「前事勿論、自今母子兄弟如初」と言って舊事を水に流して酒宴を張った。楊行密＝田頵の場合でも同じことが言える。兩者はのち不和となりついに行密は田頵を攻殺するのであるが、頵の年老いた母だけはこれを赦し、諸子に命じて子孫の禮を以て仕えしめたという。

これらの事例からすれば、義兄弟結合は必然的に、假父（母）子、假叔姪等々の關係に擴延してゆくことになる。つまり同輩關係から世代を異にする擬制家族關係へと擴がってゆくのである。とすれば、假父子結合から逆に、同輩關係を生み出すこともあるはずである。唐末、宦官楊復恭が李順節と戰って興元府に趨ったさい、興元節度使楊守亮は、「諸守義兄弟」を糾合して李順節討伐の軍を興したとある。[49] 楊守亮は復恭の從兄楊復光の假子であり、復恭・復光の假子たちは多く「守」字をとって名前とし、[50] 數十人が牧守將帥として長安附近に布列していた。「諸守義兄弟」とあるのはこれらの人びとを稱したもので、つまり假子たち同士の關係も當時義兄弟とみなされていたのである。

その場合、相互の間には序列があったのであろう。朱全忠の假子のうち朱友謙と朱漢賓は、前者が年長だというので、漢賓はこれに兄事した。[51] また、前蜀王建の假子王宗佶は諸假子のうち最年長で、且つ功を恃んで專權驕恣であったので、建はこれを殺したのであった。[52]

實子と假子の間も、共通の父をもつ以上、當然義理の兄弟關係にある。李克用の假子であった李嗣昭の子繼韜が敵方の後梁に降って臣從すると、克用の實子存勗（のちの後唐莊宗）は、「吾兄（嗣昭を指す）不幸生此梟獍」と言っている。[53] さらに、實子と假子を交えた兄弟集團全體の間に一定の序列が設けられた例も見られる。朱全忠の長子郴王友裕は若死したので、そのあとを誰が襲うかが問題となるが、殘った兄弟は、實子・假子の區別なく、つぎのように記されている。「次假子博王友文、帝特愛之、常留守東都、兼建昌宮使、次郢王友珪、其母亳州營倡也、爲左右控鶴都指揮使、次均王友貞爲東都馬步都指揮使、云々」。[54] そして友文、友珪、友貞は、友文が假子であり、後の二人が實子であろうが、ここにはそれら

を取り交ぜて序列がつけられていることが注目される。

右には朱全忠は假子の友文を特に愛したとあり、かれは實子よりも假子の方に信頼を置いたのであろう。まさに『新五代史』義兒傳の「親疏之理反其常」という情況を思わせる。實子と假子の間にも、愛憎さまざまの感情が流れた。南唐の創始者李昪（徐知誥）ははじめ楊行密の假子であったが、楊氏の諸子に容れられなかったので、行密は徐溫に頼んでその假子とした。[55] 溫のもとでも、溫の子知訓・知詢はかれに禮を盡さなかったが、季弟の知諫は、兄の禮を以てこれに仕えたという。[56]

一方、假子の方でも實子を尊重することがあった。閩王王審知の實子延翰は諸弟を疏外したので、審知の實子延鈞と假子延稟は協同して延翰を亡ぼしたが、年長の延稟は實子の延鈞を立て、「善繼先志、毋煩老兄復來」と言い殘して引き上げた。この言葉は取りようによっては將來兩者の間に爭いが起ることを豫言するものであるが、果して再び戰端が開かれ、延鈞は延稟を捕えて殺した。延鈞のその時の言葉にいう。「予不能繼先志、果煩老兄復來」と。[57]

以上要するに、假子同士の關係および假子と實子との關係は、いずれも兄弟關係とみなされたことが分る。つまり假父子結合は、單に父と子のタテの結合のみならず、第二次的に兄弟關係としてヨコの廣がりへ擴延してゆくのであるが、これをさきに見た義兄弟結合のタテへの敷衍と併せ考えると、當時の擬制血緣的結合關係は、假父子結合と義兄弟結合とによって、タテ・ヨコに、かなり複雜な網の目を織り成していたことが想像される。そしてその擬制血緣的な關係の廣がりが、貴族制社會の身分的閉鎖性とは對照的性格にあることも、ほぼ確實であろう。

このような開放された人間關係は、これまで見て來たように、とくに武人の世界において顯著であったようにおもわれるが、さらにそれは藩鎭內部の人間關係を律したのではないかと想像される。たとえば、河朔三鎭の一つである魏博軍について、「魏之牙中軍者……皆豐給厚賜、不勝驕寵、年代寖遠、父子相襲、親黨膠固……變易主帥、有同兒戲」とあるが、[58] この「親黨膠固」のなかに、こうした擬制血緣的契機も含まれてはいなかったであろうか。さきに見た吳少誠＝吳少

陽の親交が最初魏博の軍中で結ばれたものであったことを考え合わせると、このような推測もあながち不當とは言えないようにおもうのである。

それはともかくも、本稿を草することによって得た歴史の感觸は、六朝末から五代に至る數世紀の閒に、貴族制社會の身分的閉鎖性を超えて、民衆のひろびろとした世界が歩一歩切り拓かれていったのではないかという點である。そしてそこにおける擬制家族的結合は、こうした世界を象徴するものであろう。あえて言えば、かれらは家族の觀念に託して、新しい世界の友愛關係を摸索したのであって、これをヨーロッパ風にフラターニティと表現しても差し支えないのではないかという氣さえするのである。少くとも、それが家族の觀念に依存しているからと言って、これを古い家父長制の延續と見る必要はないのではなかろうか。掘り下げて考究すべき點はもとより多々殘されているが、一先ず私見を述べて大方の批正を請う次第である。

註

① 「支那近世史」『内藤湖南全集』第十卷、筑摩書房、一九六九年、三七四頁。

② 『中國中世社會と共同體』、國書刊行會、一九七六年、第一部、第1章　中國社會と封建制、布目潮渢・栗原益男著『隋唐帝國』書評『名古屋大學東洋史研究報告』三、「隋唐政治史に關する二三の問題――とくに古代末期説をめぐって――」『東洋史研究』三四―三。

③ 栗原益男「唐五代の假父子的結合の性格――主として藩帥的支配權力との關連において――」『史學雜誌』六二―六、には、宋代頃には假父子結合が消滅し、それに代って擬制兄弟的結合がみられるという趣旨のことを述べるが、唐以前から父子・兄弟の擬制關係が並行して行われたことは本文に述べる通りである。また相田氏が義兄弟結合の早い例を宋太祖の「義社兄弟」（後述）あたりに置いているのも、時期的に遲いように思う。あえて言えば、義兄弟結合は、中國社會の基本構成が血緣原理を失ってから、非貴族的、庶民的部分に脈々と存續してきたというのが本稿の考えであるが、それは特に本稿で取り上げた時代以降に顯在化したと考えられる。なお次註④參照。

④ 義兄弟的友愛關係は北朝末以前にも散見する。三國時代、劉備と關羽・張飛との關係は最も有名である。「先主爲平原相、以羽飛爲別部司馬、分統部曲、先主與二人、寢則同牀、恩若兄弟、而稠人廣坐、侍立終日、隨先主周旋、不避艱險」（『三國

志』蜀志巻六關羽傳)、「少與羽俱事先主、羽年長數歲、飛兄事之」(同上張飛傳)。同時代の公孫瓚についても、「所寵遇驕恣者、類多庸兒、若故卜數師劉緯臺・販繒李移子・賈人樂何當等三人、與之定兄弟之誓、自號爲伯謂、三人者爲仲叔季、富皆巨億、或取其女、以配己子、常稱古者曲周灌嬰之屬以譬也」(『三國志』魏志巻八本傳注引英雄記)とあり。なおこの箇條の上文には公孫瓚が衣冠の子弟を抑壓したことを記す。また南朝でも梁の武帝が范雲に兄事し(『梁書』巻十三范雲傳)、東魏では高歡が漢人貴族高乾と同帳して寢ね、叔父と呼び(『北史』巻三一高乾傳)、また功臣高隆之と兄弟關係(一説に從兄弟關係という)を結んだ(同上巻五四高隆之傳)。しかしどちらかと言えば、義兄弟結合は、貴族制の發達した南朝よりも、北族的氣風の濃い北朝で盛行したように感じられる。『顏氏家訓』巻二風操篇には、北朝の人びとが安易に義兄弟關係を結ぶことを批判してつぎのように述べている。「四海之人、結爲兄弟、亦何容易、必有志均義敵令終如始者、方可議之、一爾之後、命子拜伏、呼爲丈人、申父友之敬、身事彼親、亦宜加禮、比見北人、甚輕此節、行路相逢、便定昆季、望年觀貌、不擇是非、至有結父爲兄、託子爲弟者」。

⑤ 『舊唐書』巻五五高開道傳。なお、高開道は義兒數百人を養って親兵としていたことでも有名である。

⑥ 『資治通鑑』巻二二一乾元二年三月壬申條、『新唐書』巻二二五上逆臣・安慶緒傳。

⑦ 『九國志』巻一一楚、『資治通鑑』巻二六四天復三年四月乙未條。

⑧ 『資治通鑑』巻二五七光啓三年十一月辛巳條。

⑨ 『舊五代史』巻九一・『新五代史』巻四六兩王建立傳、『資治通鑑』巻二七六天成三年四月癸巳條。

⑩ 『舊唐書』巻一九五廻紇傳。

⑪ 『資治通鑑考異』巻二八所引『賈緯備史』。

⑫ 『資治通鑑』巻二八〇天福元年五月甲午條。

⑬ 『資治通鑑』巻二八〇天福元年七月丁未條。

⑭ 『魏書』巻八〇斛斯椿傳。

⑮ 『北史』巻三六薛孝通傳。

⑯ 『陔餘叢考』巻三一認族には、この于謹=唐瑾の他、多くの通譜・合族の例を擧げている。

⑰ 『舊唐書』巻八一李敬玄傳。

⑱ 『舊唐書』巻八二李義府傳。

⑲ 同右。

⑳ 『舊唐書』巻一八三薛懷義傳。

㉑ 『舊唐書』巻九二韋巨源傳。なお『新唐書』巻七四上宰相世系表によれば、韋后の家と巨源の家とはいずれも東眷韋氏といわれる門流に屬するが、すでに西晉頃から祖先を異にしている。

㉒ 『舊唐書』巻一二一僕固懷恩傳。

㉓ 『舊唐書』巻一五六于頔傳。

㉔ 『舊唐書』巻五六杜伏威傳・輔公祏傳。

㉕ 『隋唐嘉話』上。

㉖ 『舊唐書』巻六七李勣傳、『新唐書』巻八四單雄信傳。

㉗ 『資治通鑑考異』巻一六所引『薊門紀亂』。

㉘『舊唐書』卷一二七張光晟傳。

㉙『舊唐書』卷一四一田悅傳。

㉚『新唐書』卷二一四吳少誠傳。ただし『舊唐書』卷一四五の本傳では、これとやや異なり、吳少誠の父の翔と吳少陽が魏博軍中で友愛關係にあり、のち少誠が少陽をさがし求めて堂弟としたと記している。

㉛『舊唐書』卷一三一李皐傳。

㉜『新唐書』卷一八九田頵傳。なお伊藤宏明「淮南藩鎭の成立過程——吳・南唐政權の前提——」『名古屋大學東洋史研究報告』四、參照。

㉝『資治通鑑』卷二九一廣順二年九月・同卷二九二顯德三年二月・『資治通鑑考異』卷三〇所引『湖湘故事』。

㉞『宋史』卷二六一李瓊傳。

㉟那波利貞「唐代の社邑に就きて」『唐代社會文化史研究』創文社、一九七四年、所收。なお那波博士はこの論文のなかで、ペリオ文書中の「兄弟轉帖」と題する敦煌文獻を紹介しておられるが、中晩唐時代義兄弟關係が一般民衆の間にも普及したことを推測させる例として興味深い。

㊱『資治通鑑』卷二六六開平二年五月條に、「〔淮南〕副都統朱瑾詣〔嚴〕可求所居曰、瑾年十六七、卽橫戈躍馬、衝犯大敵、未嘗畏懾、今日對〔左牙指揮使張〕顥、不覺流汗、公面折之、如無人、乃知瑾匹夫之勇、不及公遠矣、因以兄事之」とあり。

㊲「兄弟之國」の語は、『左傳』『國語』『儀禮』などにも散見する。芮逸夫「釋兄弟之國—兼論中國古代諸父的稱謂—」『清華學報』新二卷第二期、參照。なお芮氏によれば、「兄弟之國」とは本來同父兄弟の封國を指したが、のち擴延して「同姓之國」を表わすようになったという。

㊳内藤虎次郎「支那上古史」前掲『内藤湖南全集』第十卷、九〇頁。

㊴『史記』卷七〇張儀列傳。

㊵同右。

㊶仁井田陞「六朝より唐初の身分的内婚制」『歷史學研究』九—八。

㊷拙著『世界帝國の形成』講談社、一九七七年、拙稿「東アジア世界形成期の史的構造」唐代史研究會編『隋唐帝國と東アジア世界』汲古書院、一九七九年、所收。

㊸拙稿「武后朝末年から玄宗朝初年に至る政爭について——唐代貴族制研究への一視角」『東洋史研究』一四—四。

㊹「支那近世史」前掲『内藤湖南全集』第十卷、三六三頁。

㊺「兄弟之國」の閒の國際關係は、いわゆる敵國抗禮によったものであるらしい。『資治通鑑』卷二九二顯德三年二月、南唐から後周へ遣使して、周帝に兄事したいと申れ入たことにつき、胡三省は、「以唐主猶敢抗禮、欲爲兄弟之國也」と解釋している。前述の史思明=安慶緒の場合も、完全に對等な關係を前提としている。

㊻『資治通鑑考異』卷一六所引の『薊門紀亂』によれば、七六一年（上元二）五月、史朝義は部將の李懷仙を遣って范陽を手に入れようとする。しかし范陽は高鞫仁が守っているので、懷仙は辭を卑うして義兄弟の約を結び、共に范陽地方を守って主君を助けようではないかと提案した。鞫仁がこれを信じて少し

く氣をゆるめたところを懷仙は襲って捕殺するという經緯であるが、個人間の義兄弟結合がつねに政略的なものであったならば、鞠仁のこの悲劇は起らなかったであろう。ちなみに、高鞠仁は高如震と共に義兄弟の辛萬年の生命を救った人物である（前出）。

㊼『嘉慶大清會典』卷四二刑部。
㊽『資治通鑑』卷二二二寶應元年十月丙寅條。
㊾『資治通鑑』卷二六九貞明二年十二月條及び同條胡三省注。
㊿『舊唐書』卷一八四宦官・楊復恭傳。
(51) 矢野主税「唐代に於ける假子制について」廣島文理科大學史學科教室編『史學研究記念論叢』所收、參照。
(52)『新五代史』卷四五朱漢賓傳。
(53)『資治通鑑』卷二六六開平二年二月甲辰及び三月己亥條。なお『新五代史』卷六三前蜀世家、參照。
(54)『資治通鑑』卷二七二同光元年八月壬申條。
(55)『資治通鑑』卷二六八乾化二年六月丁丑條。
(56)『新五代史』卷六二南唐世家。
(57)『資治通鑑』卷二七〇貞明四年六月癸卯條。
(58)『新五代史』卷六八閩世家。
(59)『舊唐書』卷一八一羅弘信傳。

〔附記〕 脫稿後一、二つけ加えるべき事柄に氣附いたので、左に補足しておきたい。その一つは、一〇世紀、歸義軍節度使とウイグル可汗との間に父子・兄弟・舅甥の關係が結ばれたことが、敦煌文獻によって知られている。これは本文の分類の第Ⅰ類に屬するが、さらに土肥義和氏によれば、第Ⅲ類に入れるべき義兄弟契も發見されており、他日氏によって專論されるとのことであるので、これを期待したい（土肥義和「歸義軍（唐後期・五代・宋初）時代」榎一雄編『講座敦煌2　敦煌の歴史』、一九八〇年、大東出版社、所收）。その二つは、本文に書きもらしたが、唐の武德七年、東突厥突利可汗と秦王李世民との間に兄弟の盟約が結ばれた事實である（『舊唐書』卷一四四上、『新唐書』卷二一五上兩突厥傳）。この盟約の背後には突厥內部の事情もあるが、基本的には、隋朝の冊封支配を脫して強盛化した東突厥に對して、唐側が妥協を圖って敵國關係に甘んじた、その結果であると理解したい。護雅夫「突厥と隋・唐兩王朝」『古代トルコ民族史研究Ⅰ』山川出版社、一九六七年、所收、參照。

the economic forces of the ruler, and (iii) the military reorganization of society, were the same politicians-philosophers who were later called the "legalists" (*fa-chia* 法家).

THE SWORN BONDS OF MUTUAL ALLEGIANCE FROM THE PERIOD OF THE NORTHERN DYNASTIES TO THE PERIOD OF THE FIVE DYNASTIES

TANIGAWA Michio

Under which personal bonds did the people of China live in the transition period while the process of dissolution of the aristocratic system was taking place? The artificial father-son bond which often appears in the periods of the Sui 隋, T'ang 唐 and the Five Dynasties (*Wu-tai* 五代) is one clue which throws light on this problem, but one should also consider the sworn bonds of mutual brotherhood (*i-hsiung-ti* 義兄弟), another type of artificial family bond. This article gives some examples of sworn brotherhood bonds during the period from the Northern Dynasties (*Pei-ch'ao* 北朝) to the Five Dynasties, and examines their historical meaning.

These examples can be classified on the basis of the underlying motives for the creation of the bonds, roughly into the following three groups: (i) those concluded between representatives of the state and of the prevailing political power to cement political alliances with each other, (ii) those concluded with the aim of gaining the social reputation or political influence which the other possessed, and (iii) those concluded on the basis of sentiments of solidarity, mainly depending on personal character; stemming from obligation, respect or friendship.

These bonds of brotherhood are all phenomena which appeared as the aristocratic society that held blood relationships in esteem collapsed. Firstly, bonds of type (i) were concluded between the military powers which were formed within the country, and the unified nomadic states etc. which appeared outside the frontiers. Bonds of group (ii) are phenomena of a time during which the aristocratic class could no longer monopolize political power but still possessed social reputation. Finally, bonds of type (iii) were concluded particularly between military figures and ordinary

people, including some cases where they formed societies which were politically active. They were also the forerunners of the gangster groups and secret societies which became prominent after the Sung 宋 period.

In the bonds of sworn brotherhood (as in the case of the artificial father-son relationship), the "family" relationships were extended to include all relatives of the persons concerned.

The bonds are illustrative, in a concrete way, of the popular society which formed as the exclusive character of the aristocratic society broke down.

A PARAGRAPH ON THE TRANSPORT OF OFFICIAL GRAIN IN THE MING PERIOD

The Problems of Channel Maintenance in the Area around Ch'a-ch'eng (茶城)

TANI Mitsutaka

The transport of official grain (*ts'ao-yün* 漕運) during the Ming 明 period, especially during its latter half used a stretch of the Yellow River between Hsü-chou 徐州 and Huai-an 淮安. Although this had advantages, it also had one major weakness. The main channel of the Yellow River in the eighth year of the Hung-chih 弘治 period (1495) reached down to Hsiao-fu-ch'iao 小浮橋 on the northeastern corner of Hsü-chou city, where it was joined by the Ssŭ River 泗水 (or the *Cha-ts'ao* 閘漕). However, in the last years of the Chia-ching 嘉靖 period (1522–1566) it only reached Ch'a-ch'eng 茶城, thirty *li* north of the city, and after the Lung-ch'ing 隆慶 (1567–1572) period this area became the confluence of the Yellow River and the Cha-ts'ao. But every summer and autumn the increases in the amount of the reverse flows resulted in intense silting of the junction, which became a great obstacle for the passage of the transport ships.

In order to prevent this, new channels were dug in the neighbourhood of Ch'a-ch'eng, separated from the old river. So, new artificial tributaries were dug during the Wan-li 萬曆 period (1573–1620). They were: T'a-shan 塔山, dug by Shu Ying-lung 舒應龍 in the early years; and Yang-shan 羊山, dug by Ch'en Ying 陳瑛 in the eleventh year (1583), which